東京都市大

理工系女性卒業者を調査

かなり早くに自分のロードマップ作成

東京都市大学が理工系学科の女性卒業生を対象に行ったアンケートの結果がまとまり、その報告会が十月十二日、同大学渋谷キャンパスで開かれた。

卒業生アンケートは、理工系分野で学ぶ女子学生たちに等身大のロールモデルを示そうと、一九六〇年度から二〇〇九年度までに理工系学部を卒業した女性約二千二百人を対象に実施、五百二十五人から回答を得た。回答率は二三・五%。

工学系大学を選んだ理由を尋ねたところ、「理科や数学の分野が好きだった」(二百二十四人)がトップ。以下「科学者または技術者に憧れを感じていた」(百三十六人)「新しいものを創り出したかった」(百三十四人)「就職に有利だと思った」(百二十七人)が続き、進路選択の際に、夢や目的が明確になっている人が多いことがうかがえる。

「仕事・家事・育児・介護」と「自分のための時間」との両立のために必要なことは、「夫の協力」(二百三十六人)がトップ。「多様な働き方」(百八十一人)「職場の雰囲気」(百五十一人)「保育施設の増設」(百五十一人)が続く。

調査を行った女性研究者支援室のプロジェクト担当責任者を務める岡田往子・工学部准教授は、理工系志望女子の特徴として「かなり早い時期に自分のロードマップが出来上がっている」と分析。一方で、結婚、出産などのライフイベントの影響を受けやすい現実があることから、理工系大学にできる支援として、母校が核となるネットワーク形成、ロールモデルの見える化、研究者・技術者の増加―などを挙げ、学協会や他大学との連携の必要性を指摘した。

同大学では、理工系分野での男女共同参画を進め、同分野で活躍する女性人材を増やそうと二〇〇九年八月に「女性研究者支援室」を立ち上げた。全学科への女性教員の配置、工学系の女子学生比率のアップ、女性研究者・技術者、女子学生の相談体制の整備などを柱に活動している。

※全私学新聞 2011（平成23）年11月13日掲載（転載承認済）。
※著作権は全私学新聞に帰属します。